



大分銀行

新コンセプト拠点で 賑わい呼び込む

金融コンサルタント
剣崎優人

大分市中心地区に13店舗（営業部ブロック・西新町ブロック）を擁し、預金シェア49・0%、貸金シェア48・9%（今年3月末）と圧倒的シェアを誇る大分銀行。中心街地の賑わい創出に主体的に関与している。

その象徴的な取組みが、昨年4月に市中心市街地にオープンした「大分銀行宗麟館」（写真）だ。時を同じくして、新大分駅ビル（JRおおいたシティ）、大分県立美術館（OPAM）等も相次いでオ

ープン。100年に一度と称される街づくりが進み、活性化の起爆剤となることが期待されている。昨年6月から、JR大分駅、県立美術館、市美術館等を循環する100円バス「大分きゃんばす」も試験運行されている。

大分銀行は「感動を、シェアしたい。」というブランドスローガンを掲げており、宗麟館は同行の地域密着型金融を実現するフラッグシップビルとして位置付けられている。「宗麟館」という名前は、大

分県を代表する戦国大名「大友宗麟」にちなんだもので、総合デザインをJRの「ななつ星」や新「大分駅」を手がけた水戸岡鋭治氏が担当。館内にソーリン支店、ローンプラザ支店、ほけんプラザ、ビジネスサポートセンターを配置し、法人・個人顧客の相談に応えるワンストップサービスを提供している。ソーリン支店は平日は19時まで、土日祝日も17時まで営業（GW、年末年始を除く）しており、平日の仕事帰りや週末にも利用できる。

宗麟館には、カフェやキッズスペース、オープンデッキもあり、WiFi環境も整備。銀行に用がない人も気軽に利用できるようにしている。イベントスペースでは、ビジネスマッチングフェアや各種セミナーに加えて、和傘、日田下駄、竹細工などの地元特産品の展示会を随時開催。観光情報の発信も行っている。

同行は、大分市のメインストリートである中央通り沿いに「赤レンガ館」（旧大分銀



行本店）ももつ。赤レンガ館の設計は、東京駅の設計者として知られる辰野金吾氏によるもので、100年を超える歴史をもつ、登録有形文化財だ。大分駅北部の観光シンボルとして地域活性化に貢献しようと、現在、行内に「赤レンガ館活用検討プロジェクトチーム」を発足させ検討を行っている。

「大分市中心市街地活性化協議会」や、大分の目抜き通りである197号線周辺整備に関する意見交換の場「リボン197委員会」にも参加しており、地域活性化に熱心に取り組んでいる。